

〔演出〕伊勢真一 〔撮影〕瀬川順一 〔音響構成〕木村勝英・伊藤幸毅 〔編集〕熱海鋼一 〔語り〕伊藤惣一 〔製作〕大槻秀子

重度のてんかんと知的障害をもつ少女、奈緒ちゃん。この映画は、彼女が家族に生まれ、家族が彼女に生まれた少女時代12年間を記録したヒートドキュメンタリーである。



奈緒ちゃん

育み、育まれる家族のしあわせ。

- 毎日映画コンクール記録文化映画賞受賞
- 文化庁優秀映画作品賞受賞
- 山路ふみ子福祉賞受賞
- 高崎映画祭特別賞受賞
- JSC特別賞受賞
- キネマ旬報ベスト10 第2位
- 日本映画ペンクラブベスト5 第2位
- ポレボレアカデミー作品賞受賞
- フランスワールドドキュメンタリー映画祭特別招待
- 山形国際ドキュメンタリー映画祭特別招待

まるで自分の親戚の家の出来事を見聞きするよりな、親身な気持ちで見ることのできる映画でした。とても良かったです。佐藤忠男 [映画評論家]

平凡な家庭のなかで、〈障害〉と立ち向かう。西村家の〈ノーマライゼーション〉の実践といえよう。松友了 [国際てんかん協会 副会長]

知的障害者と呼ばれる人たちが、われわれの住む社会にとっていかに平和的でかけがえない友人であったのかということが、この映画を観るとよくわかる。小室等 [シンガー]

奈緒ちゃんのインセントとユーモアがまわりを勇気づけてくれる。励ましてくれる。奈緒ちゃんはしっかりと生きている、と思った。熊笹御堂朋子 [NHK-ディレクター]

奈緒ちゃんがうらやましい! お父さん、お母さん、地域の人々! みんなあったかくて素敵! 涙が止りませんでした。石川牧子 [日本テレビアナウンサー]

子育てが必死だった時には大きかった公園が、ある日とっってもちっぽけに見える。

十二年ひとつの家族を見続けたことで、そんなふうに家族の風景が時代と共に見事にあぶり出しにされている。佐藤真 [映画監督]

photo:本橋成一

〔製作〕奈緒ちゃん製作委員会・デコ企画 〔配給〕奈緒ちゃん上映委員会 [いせフィルム内] 1995年/カラー/16ミリ/98分

「誰も分かっていないんだ!」
カメラマンは、いないけど、いるんだ、映画になった時に…」



—カメラマン瀬川順一の眼—

戦前・戦中・戦後にわたって、ルーペをのぞき続けたひとりの映画人の記録

この映画は、ドキュメンタリーカメラマンを描いたはじめてのドキュメンタリーです。

演出/伊勢真一 撮影/安井洋一郎J.S.C.、瀬川順一、瀬川 龍、柳田義和 録音/米山 靖 音楽/横内丙午 題字/戸井昌造
制作/瀬川さんを記録する会 16m/m レーザーキネコ レーザーサウンド 90分

映画監督 伊勢真一のまなざし

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2021 プレイベント・やまがた市民映画学校

共催：フォーラム山形、認定NPO法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭
会場：フォーラム山形（山形市香澄町2-8-1 [市民会館南隣] / TEL：023-632-3220）
鑑賞料金：共通前売券 1作品 1,100円（当日は劇場料金に準ずる）
*上映時間は劇場にお問い合わせください

6/18(金) - 6/24(木)



©いせフィルム

奈緒ちゃん

(監督：伊勢真一 / 1995年 / 98分 / 製作：奈緒ちゃん製作委員会・デコ企画)

姉に長女が生まれた。しかし、普通ではない、何かの病気のようにも知ったのは、記録映画の編集者だった父、伊勢長之助が亡くなった年。姉の長女、奈緒ちゃんの病気がてんかんで、知的障がいがあるとわかったのは、それからさらに数年後でした。

クランクインは1983年1月3日。8才になった奈緒ちゃんのお正月の初詣でのシーンでした。みんな手弁当での協力で、奈緒ちゃんのお父さんは「なんで、一銭にもならないことにあんなに夢中になれるのか。映画づくりにかかわる人達の気持ちは理解できない」とさかんに首をかしげていました。いわゆる福祉映画にするのはやめよう。そのために、奈緒ちゃんとその家族の普通の日々をじっくり見すえてゆこう、と奈緒ちゃんのもとへ通い続けました。

このフィルムには「しあわせ」が写っているとつぶやいたのは、大ベテランのカメラマン、瀬川順一さん。「しあわせ」という言葉がなぜだかとてもなつかしく、新鮮な響きに聞えたのを今でも忘れません。(しあわせ、家族のしあわせ) 奈緒ちゃんが家族に生まれ、家族が奈緒ちゃんに生まれた12年間の記録は1995年に完成、全国各地で500ヶ所を越える自主上映が行われました。(監督 伊勢真一)

毎日映画コンクール記録映画賞グランプリ / '95年度キネマ旬報文化映画ベストテン第2位 / 第6回文化庁優秀映画作品賞 / 山路ふみ子福祉賞 / JSC 特別賞 / 高崎映画祭特別賞 / 日本映画ペンクラブドキュメンタリー部門第2位 / ボレボレアカデミー作品賞 / フランスワールドドキュメンタリー映画祭特別招待 / 山形国際ドキュメンタリー映画祭特別招待

ルーペ カメラマン 瀬川順一の眼

(監督：伊勢真一 / 1996年 / 89分 / 製作：瀬川さんを記録する会)

戦前から戦中、そして戦後にかけて劇映画をはじめドキュメンタリー映画、短編映画など幅広い分野で活躍し、95年10月5日に80歳で亡くなったカメラマン、瀬川順一氏の足跡を追った長編ドキュメンタリー。題名の「ルーペ」とはカメラマンが撮影中に覗くファインダーのことを指している。瀬川氏は1931年に松竹キネマ蒲田撮影所に入り、のちに東宝の前身PCLへ移籍してカメラマンとなった。戦時中は3たび出征し、その合間に亀井文夫監督の『戦ふ兵隊』のスタッフとして中国戦線に赴いた。戦後は『銀嶺の果て』『ジャコ万と鉄(1949)』などの劇映画や、『法隆寺』『新しい製鉄所』『アントニー・ガウディ』などのドキュメンタリーのカメラマンをつとめている。『をどらばをどれ』や瀬川氏の遺作となった『奈緒ちゃん』でコンビを組んだ伊勢真一監督が10年近くにわたって瀬川氏にカメラを向け、ドキュメンタリーについて、カメラマンについて語る氏の姿を収めた貴重な記録である。

「作品を共有するのではなく、私有し合おう。それぞれのスタッフが思う存分私有し合うことが、ドキュメンタリーの映画づくりだ…」という持論を持っていた瀬川さんの撮影現場は、ある時はその私有し合いのために、壮絶でもありました。「私有し合う」といえば、聞こえは良いですが、要するに「できるだけみんなわがままでいようよ」ということで、その先頭に立って、瀬川さんはガキ大将ぶりを発揮します。ガキ大将は、時にはいじめっ子にもなります。(1996 監督 伊勢真一)

96年度キネマ旬報文化映画ベストテン第3位 / 日本映画ペンクラブ記録映画グランプリ受賞

6/25(金) - 7/1(木)



©いせフィルム

伊勢 真一

ISE SHINICHI

1949年東京都生まれ。ドキュメンタリー映像作家。日常をふんわりと映し出す映像の中に、生きることの素晴らしさが込められた独特の作風で知られる。『奈緒ちゃん』(1995年)『えんとこ』(1999年)をはじめ、長年にわたり数多くのヒューマンドキュメンタリーを自主製作・自主上映で創りつづけている。『風のかたち - 小児がん仲間たちの10年 -』(2009年)文化庁映画賞・カトリック映画賞受賞、『大丈夫。 - 小児科医・細谷亮太のコトバ -』(2011年)キネマ旬報文化映画第1位、『傍(かたわら)〜3月11日からの旅〜』(2012年)キネ

マ旬報文化映画第6位、『シバ 縄文犬のゆめ』(2013年)、『妻の病 - レビー小体型認知症 -』(2014年)、『ゆめのほとり - 認知症グループホーム 福寿荘 -』(2015年)、『いのちのかたち - 画家・絵本作家 いせひでこ -』(2016年)、『やさしくな - 奈緒ちゃんと家族の35年 -』(2017年)キネマ旬報文化映画第3位など。2012年日本映画ペンクラブ功労賞、2013年度シネマ夢倶楽部賞受賞。近作は『えんとこの歌 - 寝たきり歌人・遠藤滋 -』(2019年)で毎日映画コンクール・ドキュメンタリー賞、文化庁映画賞を受賞した。

